

第三十一章 シルクロードの起点

中華明国は一帶一路としてのシルクロードの起点を首都ペッキンと定めた。特急ユーロ・ライナーはウクライナー共和国、ウクベキスタン共和国、イリ王国、新疆ウイルス自治領を經由してペッキンに向かっていたが、いつの間にか豊かな流量を誇っていた大河が涸れて消失するように新疆ウイルス自治領から、あるいはイリ王国から東南アジア南下して海底トンネルを經由して鯛湾に向かうルートが新しいシルクロードとなった。

それを知った中華明国の最高指導者は激怒してソシアと同じようにこの鉄道網を破壊しようとするが、強力なシルドの前になすすべがない。もちろん核兵器を使えば簡単に破戒できるのだがリスクが大きすぎる。

次々と特急ユーロ・ライナーで鯛湾を訪れるユーロ連合の首脳に中華明国は神経を尖らせる。中華明国と鯛湾は一つだと主張しても聞く耳を持つ国は多くはない。

中華明国がユーロ連合を敵対視するのは歴史的な理由がある。一昔前ヨーロッパ諸国は中華明国の前の王朝中華清国を麻薬国家に仕立てあげると領土を割譲して植民地化した。だから今や世界の工場と言われるほど国力を持った中華明国はユーロ連合と鯛湾と仲良くすることを許すはずがない。むしろ鯛湾併合を急ぐ。

一方、ユーロ連合のみならずいわゆる民主主義的な価値観を持つ国々の戦闘艦が鯛湾海峡を航行して中華民国を刺激する。鯛湾海峡の波は台風が来なくても津波のように高く荒れた海になる。その中を大形戦闘潜水艦ザットンが悠々と航行、と言うより鯨が泳ぐかのように進む。上から見ると黒いが船体をひねると白い。パンダやオルカのような白黒の愛嬌のある塗り分けではないがモノクロ系の柔らかさそうな船体を持つ。ザトウクジラによく似ているが大きさはまったく違う。巨大タンカーに匹敵する大きさで胸ビレのような水平舵は五十メートルに達する。しかも自在に動くから前方に繰り出せば破壊すると言うよりは切り裂くほどの鋭さを持つ。メンツがあるから悪天候でも軍事演習を中止するわけにはいかない。中華民国海軍は空母を中心に百隻もの艦隊を組んで鯛湾島の周辺で軍事訓練を開始する。しかし、鯛湾海軍は静観する。もちろん海面下ではザットンが潜む。

海は荒れているが天候は快晴で風も穏やかだ。総統府で鯛湾総統とイリがドローンからの映像を見つめる。

「向こうは訓練と称していますがこれは実戦です」

空母から戦闘機が飛び立つがこの波では着艦は非常に危険を伴う。それでも次々と飛び立つ。「中華民国の一人っ子政策をご存じですか」

唐突な質問にイリは首を傾げながら、ただ「ハイ」とだけ答える。

「中華民国は社会主義国のくせに資本主義国家よりも長いスパンで国の将来を考えるのが苦

手なのです」

確かに資本主義国家は目の前の利益に目を奪われて短期的な視点で政策をたてる。

「五カ年計画とか称して長い経済計画を発表しますね。一人っ子政策も随分長い間続けられいたような気がします」

総統に代わって長老が自信満々に応じる。

「人口が増え続けると食料不足になると言う単純な理由で始まった政策。将来の人口構成に歪みが生じるという点はまったく考慮されなかった。一人っ子は独身を謳歌するし結婚しても子どもを作りたがらない。結局将来の担い手を失うことになったのじゃ」

イリは納得するが目の前で鯛湾を威嚇する中華明国軍の空母との関係がよく理解できない。突然その空母の横に水しぶき上がる。真っ黒な長く鋭い翼のようなものが現れる。そして空を切ると黒から白に変わる。その途端空母が前半分と後ろ半分に分かれると前部が浮き上がる。推進器を持つ後部の前進しようとする力が切断された前部を押し上げて上下に分かれる。

ザットンのナイフのような巨大胸びれが空母を斜めに切断したのだ。ザットンの巨大な尾びれが海面をたたくと空母を囲む艦船は右往左往するだけで救助活動するどころか我先に逃げようとする。そうなると統率がとれなくなるので衝突して沈没するいわゆる感染事故が増える。

大混乱に陥って乗組員が次々と海に飛び込む。中華明国海軍はほぼ全滅に近かった。

さらにザットンの動物的な遊泳で中華明国の潜水艦艦隊も浮上を余儀なくされた。そうなる

とすぐには沈まないただの船舶に成り下がる。波間に漂う中華民国海軍の乗組員が多すぎるので救助活動は困難を極める。しかも今度は本物のサメが現れる。

「救助しなさい」

総統が命令を下す。そしてイリに向かって苦笑する。

「私どもは一人っ子政策をとっていません。子孫を増やさない選択をする生命体は人間だけです。特に漢民族はひどすぎます。生命体としての本質を捨ててしまった」

もし一つの中華民国を目指すなら、この鯛湾の総統を最高指導者に迎えるべきかもしれないとイリは思ったが話題を変える。

「鯛湾にはザットン、海獣パнда、イエロー・タイガー……が。ウクライナ共和国にはザットン以外はすべてあります。と言うことはここで製造されてウクライナに運ばれたのですか？」

総統はニコリともせずに応える。

「そうです。シルクロードという道は存在しません。それは大昔の話です。中華民国は一带一路と言ってシルクロードを復活させようとしませんが、まやかしに過ぎません。今やアジアとヨーロッパを結ぶロードはライナーです。アイアンロード、鉄道です。その起点は中華民国のベツキンではなくここ鯛ペイです」

イリは素早く納得する。